五、前漢

一、草創期の模索

前二一〇年、中国を統一した秦の始皇帝死去。
前二〇九年、陳勝・呉広の乱を皮切りに、各地で反乱が広がる。
やがて、項梁（項羽のおじ）によって擁立された楚の懐王を中心に一つのまとまりを形成。
前二〇六年、秦の滅亡後、項羽と劉邦による楚漢抗争を経て、漢王朝が成立。
高祖劉邦から文帝・景帝までは秦の政治システムを踏襲することはできないとの前提の上で新システムの試行錯誤が試みられ、〔1　　〕に至り、政治的・思想的方向性が整う。

・〔2　　〕…高祖劉邦に対し、戦場で天下は取れても、そのままでは天下を治めることはできないとして、〔3　　〕による国家統治を説く。

〔4　　〕…秦が滅んだ理由、劉邦が天下を得た理由、古の成敗の国の状況を著す。

・〔5　　〕…秦の博士官だった人物。朝廷内の臣下たちの無法状態を苦々しく思い、礼制を持ち込む。（儒教的礼制が整備される。）

高祖期は秦の統治体制（郡県制という中央集権制や法治主義）をアンチテーゼとし、実質的には秦の体制を踏襲しながらも、表向きには反秦の立場をとる。

→〔6　　〕（郡県制と封建制の併用）と儒家思想。

ただし、儒教が本格的に王朝を支えるのは少し後であり、主流は〔7　　〕。

伝説の帝王 黄帝を始祖とし、老子が大成したとする道家の一学派の思想で、為政者の間で流行。

※一九七三年、湖南省長沙市で発見された〔8　　〕の中に、「黄老思想」の実態が窺える文献（「黄帝四経」）が含まれていた。

・高祖の死後、妻の呂太后が朝廷内で大きな力を持ち、後を継いだ恵帝は政治から離れて夭折。

恵帝期、前一九一年の〔9　　〕（書物の所蔵を禁じた秦の法律）の廃止。

その後、呂太后は次々に幼い皇帝を擁立し、宮中内の権力を完全に掌握。

しかし、反呂氏グループのクーデターによって、呂太后死後に呂氏一族は一掃。

恵帝には子がなかったことから、臣下らは次期皇帝を選抜し、文帝が即位。

・〔10　　〕

前漢の建国当初は、楚漢抗争に手柄のあった臣下たちが諸侯王に名を連ねる。

劉氏ではない者たちを異姓諸侯王といい、在位中の高祖の仕事はこれらの排除が中心だった。

文帝・景帝期には、今度は力を持ち始めた劉氏一族の同姓諸侯王たちが問題となる。

・〔11　　〕（文帝期）―〔12　　〕

従来の長子のみの相続を庶子すべてに分割相続させ、徐々に諸侯王の力を減殺させる。

ただし、高祖体制を死守せんとする従来の家臣団から嫌われ、文帝にも疎んじられる。

・〔13　　〕（景帝期）

同姓諸侯王らの力を削ぐためにスパイを送り込み、彼らの追い落としを行う。しかし、過激なやり方は諸侯王らの怒りを買い、前一五四年に晁錯を打つことを名目として、呉楚七国の乱が起こる。

前一二七年、武帝の推恩の令（諸侯王に子弟への分封を許すというもの）が施行され、諸侯王の勢力は次第に削減されていく。

二、儒教国教化

二―一、〔14　　〕…文帝と皇帝位を争った淮南王劉長の子。不遜な言行の多かった父とは異なり、学問好きな王。諸侯王問題に関わる事件―〔15　　〕提出。

多くの学者を集めて編纂。雑家に分類され、百科全書的著作と見られているが、当時においては道家と見るべき文献。大きなテーマの一つは、〔16　　〕。皇帝はそれを行い、諸侯王たちの自治を容認するという立場を主張。

劉安は甥の武帝に高祖体制の継続を示唆したが、武帝はその体制の枠を破り、新たな体制を創成。

皇帝権力の強化を主張した董仲舒の思想に比べれば、劉安の道家思想は武帝の志向とは乖離。

二―二、〔17　　〕

A〔18　　〕との関係

主流とされる解釈…三回にわたる武帝の諮問に答えた〔19〕　　〕によって、武帝が諸子百家の異学を禁じて〔20〕　　〕を置き、ここに儒教国教化が始まったとする説。ただし、董仲舒の賢良対策が何年に提出されたかという問題については諸説ある。議論は現在進行形。ただし経書の博士官は景帝の頃から徐々に増え、武帝期を経て宣帝・元帝期にはかなりの人数にのぼること、武帝期には〔21〕　　〕が開設され、その定員が徐々に増加していくことなどから、儒教が政治その他に比重を占めるようになったと言える。

◎武帝期の五経博士を置くことに端を発する〔22〕　　〕は、昭帝・宣帝の準備期間を経て、元帝・成帝に飛躍的に展開し、後漢期に至って国教化が成ったと考えられる。

B

〔23〕　　〕

『春秋』に付けられた注釈書の一つ〔24〕　　〕を解析する学問。

『春秋』は春秋時代の魯の隠公から哀公までの十二公、二四二年の歴史にすぎないが、これに〔25〕　　〕が独自の理念と緻密な理論をもって筆削を加えたとする。

→独特な「筆法」を用いて、〔26〕　　〕が込められていると認識。（316頁参照）

これを明らかにするのが春秋学で、当時は『公羊伝』にもとづく公羊学が中心。

董仲舒にとって、治乱存亡の原理を記し、王道を成立させるための政治マニュアル。

〔27〕　　〕（『公羊伝』哀公一四年）

周を継承する漢王朝（後聖）のために孔子は『春秋』を制作したとする説。

→〔28〕　　〕（一統を大ぶ）…『公羊伝』を用いて皇帝権の根拠付けを行う。

C

〔29〕　　〕

〔30〕　　〕に陰陽五行説を加味して作られた皇帝権力を抑えるためのシステム。皇帝の統治が天文・自然などの現象に結果となって現れるというもので、善政を行えば瑞祥が現れ、悪政を行えば災異が現れるとされる。

災…小さな害・異常現象。異…大きな害・異常現象。「災」の時点で悪政を改めなかった時に降る。

その実例と解釈が、董仲舒の〔31〕　　〕や『漢書』五行志に記されている。

皇帝と天が関わるのは、各王朝はその初代が天から命を受けているとの信仰があったことが背景。

→〔32〕　　〕…受命した王は、天に代わってその意志に従いつつ政治を行う。

二―三、〔33〕　　〕

正史のスタイルを確立。父司馬談の遺言を受けて歴史叙述の業を完成。（316頁参照）

〔34〕　　〕―紀伝体の歴史書

本紀（歴代皇帝の事跡）、世家（各国の国別史・諸侯国の歴史）、表（各時代ごとの年表）、列伝（人物の伝記・周辺諸国の歴史）、書（制度・その他環境の歴史）で構成される。

司馬遷のメッセージ…〔35〕　　〕に対する批判的な筆致。わずかな兵力で匈奴と戦い、力尽きて投降した李陵を弁護したため、武帝の怒りに触れ、宮刑に処せられたため。

三、儒教統制下の諸問題

・〔36〕　　〕…財政政策。

巫蠱の乱により、武帝の子戾太子が自害。その後、武帝の晩年に生まれた昭帝が太子となるが、即位当初は幼かったため、朝廷内の権力は霍光が手中にする。

武帝の前一一八年、財政確保のための塩と鉄を専売する政策を実施。→混乱をもたらす。

昭帝の前八一年、塩鉄会議の開催。政府の代表と民間の有識者が討論。

→〔37〕　　〕…宣帝期に桓寛がまとめる。当時の漢王朝がかかえていた問題を、重商主義の丞相・御史と重農主義の賢良・文学との議論形式で明らかにしていく。その結果、酒の専売と関内の鉄官の廃止が実行されたが、賢良・文学の主張は入れられず。

この頃、「孝」を諸徳の根本とする〔38〕　　〕が重視され、太子の教育の書として機能。

・〔39〕　　〕…経書の解釈・優劣を定める。

昭帝の死後、戾太子の孫、宣帝即位。霍光の死とともに霍一族の勢力を排除、一族は誅殺。

前五二年、本会議開催。本会議の記録は現在はすべて滅び、断片的にしか見られないが、当時の〔40〕　　〕が国家内に浸透し、さらにその解釈も多様化しつつあったことを示す。